

仙台城茶室「残月亭」と武家茶道の茶室考



仙台藩茶道石州流清水派

御 供 眞 人

出づるより 入る山の端はいづくぞと

月に間はまし武蔵野の原

(仙台藩祖伊達政宗公御詠)

残月亭、仙臺緑彩館もりの庭園へ移転決定

令和三年（二〇二二）十二月十四日付け河北新報記事によれば、仙台市が片倉小十郎屋敷跡に整備中の青葉山公園センターの名称が「仙臺緑彩館」に決まり、「全国都市緑化フェア」開幕に合わせ令和五年（二〇二三）四月二十六日に開館、仙台藩ゆかりの茶室「残月亭」（旧姉齒家茶室）を緑彩館南側の「もりの庭園」に移転する方針で工事を進める、とのことです。昨年の関三十一号で述べたように、多くの茶人や市民、国民に愛される茶室になることを願っております。

仙台城絵図

東北大学東北アジア研究センターは令和三年（二〇二二）四月一六日に、『東北大学川内キャンパスの歴史新発見！「仙台城二の丸と川内武家屋敷地―東北大学川内キャンパスの歴史遺産―」を発行』とのタイトルで、東北大学埋蔵文化財調査室等との共同研究の成果を次の通り記者発表しました。

共同研究「仙台城の利用実態に関する復元的研究―近世東北地方の城郭比較分析―」の成果印刷物として、「仙台城二の丸と川内武家屋敷地―東北大学川内キャンパスの歴史遺産―」を作成しました。仙台城といえば、本丸が注目され、その総合的な調査成果は、『史跡仙台城跡保存計画』（仙台教育委員会、二〇一九年）にまとめられています。この共同研究では、仙台城のなかでも二の丸（東北大学川内南キャンパス）と川内武家屋敷地（同北キャンパス）を対象としております。本パンフレットでは、東北大学埋蔵文化財調査室の発掘調査の蓄積に文献史学側の歴史資料調査の成果をふまえ、武家屋敷の住環境を詳しく紹介しています。

また、パンフレットに掲載した『仙台城絵図』（市立米沢図書館所蔵、岩瀬家文書）は、これまで知られておらず、仙台城の研究を進める上でその活用が期待されます。

この成果であるパンフレット（以下、「東北大パンフ」と記す。）を活用し、仙台城茶室残月亭について武家茶道の茶室の役割を考察します。

武家茶道の茶室考

筆者は、武家茶道である石州流清水派の茶室仙台城残月亭には、軍用の三つの役割があると考えました。

一つ目は、「物見」としての役割です。

七代伊達重村公（徹山公・一七四二〜一七九六）時代の安永年間（一七七〇年代）の作とみられる『残月台本荒萩巻之二』に、残月亭については、「私伝曰。寂光寺は本御本丸に立居たり。今残月亭の辺也。この残月亭は御本丸、御二丸間にて御二ノ丸御座の間向北（ママ）高き所に在り。御物見亭なり。又は御軍用の節物見にもなれり。」と述べられています。

現在も、東北大学植物園の『残月亭跡』案内板には「御物見亭とも呼ばれた」と記されており、ここに戦の時の物見として高台に建てられていることが明示されています。茶室より敵の軍勢を眺め、茶で心を静めながら戦略をめぐらす姿が想像できます（図1）。

二つ目は、「水の手」としての役割です。古来籠城戦で最も重要なものが水の確保です。茶室は水質の良い水源近くに設けられ、あるいは庭園に池を配するなど、水の手近くに建てられており、城中の水の管理拠点としての役割も担っていたと考えられます。残月亭関連の「水上ノ茶亭」「水上御茶屋」という「水上」という言葉も御裏林の水上（みなかみ）を示しているものと考えられます。また、広大な池泉を備える廻遊式大名庭園は、景色の美しさや平時のもてなし、外交だけでなく、非常時の飲み水や消火用水など、戦に備えた施設として作られていると考えられます。仙台



図1 残月亭跡説明板
（東北大学植物園）

城には庭園ではありませんが御裏林からの水を貯める中嶋池があり、仙台藩で石州流清水派が関わっていると考えられる気仙沼の煙雲館庭園（鮎貝氏、伝二世清水動閑作）、岩出山の有備館庭園（岩出山伊達氏、三世清水道竿作）、佐沼の亙理氏庭園（伝三世清水道竿作）も池泉を備えています。

三つ目は、「退き口」としての役割です。すなわち落城時の脱け道など非常時の避難口として、間道の起点に建てられているのではないかと考えられます。

仙台城絵図の「残月亭」

『仙台城絵図』（市立米沢図書館所蔵・岩瀬家文書六九六）は、米沢藩士で江戸時代初期から代々米沢藩の御用絵師を務めた岩瀬家に伝来した絵図で、東は大橋、西は青葉山、南は龍ノ口沢、北は亀岡八幡宮の範囲を俯瞰的に描いています。その特徴は、本丸・二の丸など城関連施設のほか、登米（とよま）伊達家、水沢伊達家、片倉家などの武家屋敷を描いた点です。この居住者名から十八世紀後半の内容を描いたものと推測されています。東北大パンフの『仙台城絵図』で「残月亭（茶室、宝永七年（一七一〇）

設置）」は「二ノ丸御城居（二の丸御殿）」から御裏林に上った高台に一軒家として記され、そこから更に「霧ハキ御殿（郷六御殿力）」へと道が続いております（図2）。

郷六御殿は、現在の東北自動車道仙台宮城IC付近にある広瀬川北堰のすぐ上流右岸、現在のコカ・コーラ近辺に「郷六御殿跡」の史跡標柱（仙台市青葉区郷六字屋敷）が立てられており、四代藩主伊達綱村公が、藩士上野市郎兵衛らに命じて別荘として造営した旨、記されています。また、近隣には、地名の由来ともなった国分氏の家臣郷六氏の居城跡「郷六城跡」の史跡標柱（仙台市青葉区郷六字庄子）があり、伊達家以前より要所であったことがわかります。

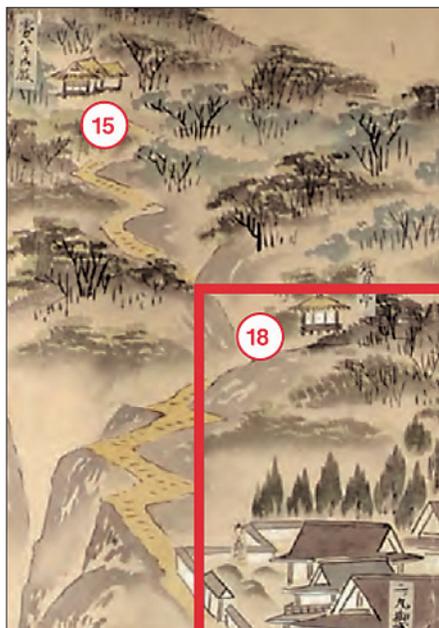


図2 『仙台城絵図』より⑮「残月亭」と⑮「霧ハキ御殿」（郷六御殿力）（東北大パンフ）

仙台城茶室「残月亭」から宮床への道

仙台城茶室残月亭から青葉山の御裏林を抜け郷六屋敷に至る間道があることは、宮床（みやとこ）伊達家の伝承にもあります。宮床伊達家は仙台藩五代藩主吉村（獅山）公を出した家です。吉村公は、宝永七年（一七一〇）八月に立石上之茶亭を落成し数寄屋残月亭の額を掲げて残月亭と号し、続いて正徳四年（一七一四）孟夏に扁額を模刻し、立石上之茶亭に懸け替えた、正に仙台城茶室残月亭の創建者といえる存在です。

宮床伊達家の居城、田手岡館跡に建てられた大和町歴史博物館「宮床宝蔵」の展示によると、「宮床に伊達家の近親が置かれたのはなぜか。」「いよいよ青葉城（筆者注…仙台城の雅称）落城となったとき、伊達本家を宮床に迎え入れるためだという考えです。この考えは宮床伊達家にも代々伝えられていて、注目されます。青葉城から裏口を出て竜の口（立ち退き口）を抜けると、郷六に出ます。ここにはかつて小さいお城のような郷六屋敷がありました。ここから根白石を経て宮床に向かうことができるのです。」とあり、青葉城から宮床まで約二十七kmの道程としています。

また、建築家首藤尚丈氏は次のように述べております。

「青葉城から古道「羽州最上街道」が郷六まで抜けていて、この道は、虎ノ門より残月亭の前を通り、最上台（東北大学植物園内）へと至り、そこから青葉山の大深沢を尾根づたいに西へ越えて現在の東北大原子核研究所あたりから、さらに西進して青葉山ゴルフ場入口付近から北西の尾根づたいに行き郷六妻の窪（筆者注…仙台市青葉区郷六字久保カ）に出たのである。妻の窪の旧安達家の付近には道祖神があり、古街道の要所であった。この距離は四kmであり一里でもあるので、人の足で小一時間の道程であった。」

そして郷六屋敷から北上すると、まず落合、続いて綱木という地名があり、青葉城から落ち合い、駒つなぎ（綱木）につないだ馬に乗る、として次のように述べております。「郷六より、さらに一時間の歩行で権現森下の綱木へ行き」「綱木には、古く朽ち果てた神社らしきものがあり、調べてみたら馬頭観音であった。」「この綱木からは北は塩野沢を経て、泉ヶ岳方面（根白石方面）へ、西は白坂、あるいは赤坂をへて、定義へと向かうことができる。」「まず綱木から根白石の大満寺へと右廻りに至る。」「そこから山を一つ越すと、泉ヶ岳の裏の「七つ森」に至るのだが、そこには「宮床」があり」「大満寺から宮床伊達家まで十二kmの

道程で走馬すれば三〇分である。」実際、郷六から落合に出で、国道四五七号線を宮床まで北上すると、これらの地名を確認することが出来ます。

林子平先生の健脚と石州流茶道

筆者の尊敬する仙台の先哲林子平（六無齋・一七三八～九三）先生は生前より健脚で知られており、『六無齋逸話集』には「子平大急用江戸へ罷登りと申す節は、仙台城御裏林と申す所より山道を参候由、多分道中江戸迄三日位にて九十余里の所罷登り…」と記され、地理を知ることと健脚で江戸まで三日で急行したと伝えています。これは伝説の類としても、安永二年（一七七三）の『林子平先生旅行日記』には「四月廿四日仙台発足、白石一泊、二十五日一丁の目町武蔵屋長三方一泊、二十八日白沢町水戸屋一泊、二十九日中田町藤屋一泊、晦日（筆者注…三十日）江戸小石川小日向町手塚市郎右衛門着」とあり、仙台江戸間を七日間で歩いていきます。仙台から江戸小石川までは約三四〇kmほどです。一日約四十八kmの計算となり、いかに健脚であったかがわかります。子平先生は松前から長崎まで全国を遊歴し、軽装で思い立ったら身軽に特別な用意なく平常の姿で旅に

出たこと、日常の健脚が常在戰場を心掛けた武人の鍛錬であり、「書ヲ讀ムハ可也。然レドモ足迹天下ニ遍キ者ニシテ、然ル後ニ書ヲ讀マバ、亦以テ用ヲ爲スニ足ラン」との言葉どおり、天下遍歴の旅が実学の間であったことがわかります。

子平先生が地理を知り、仙台城の御裏林から間道を抜けて旅していたこと、それが江戸時代の仙台藩で知られていた事実は、仙台城茶室残月亭がその間道の起点であったことを示す証左である、といえましょう。

また、林子平先生の姉は仙台藩六代藩主伊達宗村（忠山）公の側室円智院（おきよの方）であり、その間に生まれた方子（よりこ）・彰姫（せいひめ）は松江藩の松平出羽守治郷（不昧）公の正室として嫁しております。仙台と松江の石州流茶道を、林子平先生の姪である方子・彰姫がっていないことに不思議な縁を感じます。

なお、筆者は宮城県仙台第一高等学校在学中に、学校敷地の南隣が子平先生の兄林嘉善の屋敷であったことを知りました。子平先生はこの地から全国に旅をし、また『海国兵談』を著し、それにより寛政三年（一七九一）幕府より同書の版木没収のうえ塾居を命ぜられ、「親もなし妻なし子なしはん木（版木）なしかね（金）もなければ死にた

くもなし」と詠じて「六無齋」と号し、二年後の寛政五年（一七九三）五十六歳で病没されたこと、その傍らで自身が学んでいることに、大いに感動したものでした。平成三十年（二〇一八）仙台市教育委員会により「林子平ゆかりの地」の説明版（図3）が設置されたことを大変嬉しく思います。



図3. 『林子平ゆかりの地』説明版より林子平肖像と林嘉善宅

現代の健脚 秋月謙一氏

余談ですが、現代の健脚として、筆者の友人であり早稲田大学能楽連盟の後輩である秋月謙一氏を紹介します。常に着物姿で、携帯電話を持たず（固定電話も使わず）毛筆の手紙が連絡手段、歩くことこそ日本の心を養うと唱え、自動車やバス、鉄道、飛行機は用いず歩いて全国を旅し、観世流の謡曲仕舞とピアノを嗜み、聖書と古事記、神の義と日本精神の研究に取り組む大丈夫です。

平成二十二年（二〇一〇）九月十七日に神奈川県厚木の自宅を出発、十月四日に仙台の筆者を着物姿で歩いて訪ねて来ました。その後、仙台から京都へ上洛。しばらく京都に住まい京大図書館で学問に励んだ後、九州鹿児島まで歩き、熊本県水俣市に約一年十か月滞在、平成二十六年（二〇一四）厚木に帰りました（図4、5）。

東日本大震災後の平成三十年（二〇一八）四月にも、実際に被災地を歩き、見聞きするため、厚木から水戸、福島を経て再び仙台まで歩いて訪れ、筆者と共に南三陸町で復興ボランティアに汗を流した後、岩手、青森、秋田、山形、福島会津地方を経て、厚木に帰宅しました。

現在は畑仕事と研究の晴耕雨読暮らしの傍ら、自宅で青

少年や在所の荻野村のため寺子屋を開いています。

松尾芭蕉が入った茶室

その秋月氏より、松尾芭蕉の奥の細道を読む会を計画しており、芭蕉に同行した曾良の日記も読んでいたところ、仙台滞在中の箇所茶室の記述があると教示いただき、確認すると確かに「一六日天氣能。亀が岡八幡へ詣。城の追手ヨリ入。俄二雨降ル。茶室へ入。止テ帰ル。」とあります。これは元禄二年（一六八九）五月六日の記述ですが、仙台北内にある亀岡八幡神社で、にわか雨にあつて入ったのは、どこの茶室なのでしょう。



○「着物に結い髪、雪駄で暮らす」水俣市で「お侍さん」ラッシュ「サムライ」の愛称で親しまれる秋月謙一さん(36) 神奈川県出身。身長が27日、約10カ月暮らした四国市を離れ、徒歩で東京に旅立った。交流のあった市民約20人が市役所で送別会を開き、別れを惜しんだ。

○「秋月さんは早稲田大卒業後、車や電車など安眠の利便に極力頼らないライフスタイルを追求。水俣市では、胎性水俣病患者らの支援施設「ほっとはうす」でアルバイトをする一方、豊富な古典の知識で、徳島縣や四国戦「めぐり」をめぐり、日本や世界に広がる歴史を研究する市民に助けられ、海を巡りながら約3カ月かけて東京に戻るとして、「古典の大切さや人間らしさを子どもたちに教える塾を開きたい」という。

(隅川俊彦)

図4

着物・雪駄で1000キロ完歩



「歩くのが自分の仕事」と話す秋月さん。このように姿で九州から徒歩で戻った厚木市

着物と雪駄履きの生活から「サムライ」の愛称を持ち、「歩くのが自分の仕事」と徒歩移動を実践する福祉施設非常勤職員・秋月謙一さん(36) 厚木市まつかけ台IIが今夏、滞在中だった熊本県水俣市から厚木市にふたたび通りの姿で歩いて戻った。

秋月さんは4月27日に水俣市を出発。途中、大分県から船で四国に渡った後、本州の福半島を渡りながら東海地方を抜け、7月7日に厚木市に到着した。背中には衣類などを詰め込んだリュックを背負い、70日ほどを歩いて1千キロを歩き旅を振り返る。秋月さんは米国の高校を卒業後、道中、雪駄を履き足

厚木の秋月さん、熊本・水俣から

愛称サムライ「歩くのが仕事」

卒業後、入学した早稲田大で能のサクルに所属。学んだ日本や日本人の心大切にしたいと卒業後は着物姿で通っている。

一方で電車やバス、タクシーなど現代の交通手段に頼らないライフスタイルを模索。どこに行くにも歩くを決めているという。大学を卒業して東京を離れ、神奈川県の実家に戻った時も徒歩で帰った。

なぜそんなに歩くのかとよく聞かれるが、返答は「歩くのが仕事になっていく。以前、列車に「魚が水の中を泳ぎ、鳥が空を飛ぶように人間とは歩くものだと知った」と書いたことがあるが、今回、自身の最長距離を歩き通し、「やっぱりもう仕事ですね」と会心の笑顔を見せた。

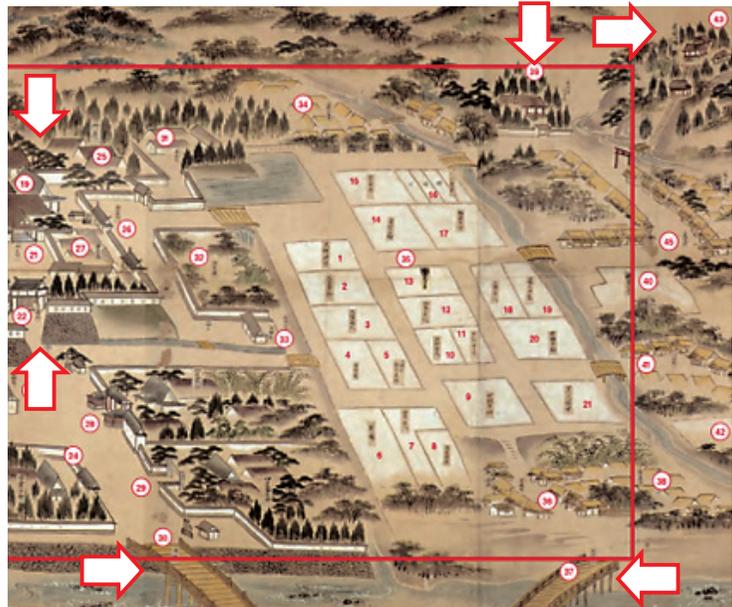
水俣で知り合った女性と結婚し、福祉施設勤務のかわり、東京では古典を教える塾も開く、福祉施設内では制服だが、通勤はもろろん道1時間半の「着物ウォーキング」だ。(杉山浩志)

- 図4 水俣出発記事 熊本日日新聞 2014. 4. 28
- 図5 厚木到着記事 朝日新聞 2014. 10. 5

この時、仙台藩主は四代伊達綱村（肯山）公で仙台藩茶道頭は二世清水動閑です。『肯山公治家記録』によればその二年後の元禄四年（一六九一）三月二十六日条に「数寄屋造畢ノ賀儀」とあり、それまでの数寄屋を改築したとの記述があることから、この時代の仙台城の茶室は二代藩主忠宗（義山）公の造営した二の丸西南にある数寄屋群です。藩外からの旅人がわか雨だからと、この数寄屋や、城内の武家屋敷の茶室に入ることが出来るとは考えられません。亀岡八幡神社にも茶室はありません。神社の隣にある八幡別当千手院（神社の別当寺院・現川内コミュニティセンター付近）には茶室があった可能性がありますが、参詣客に雨宿りを乞われ茶室に入れるでしょうか。また、城下より亀岡八幡への参詣は大工橋（現中ノ瀬橋）を通る方が近くまた身分的にも適当なところ、追手すなわち大橋から大手門へ通る城の大手口から入ることも不審です（図6）。

松尾芭蕉は忍者で有名な伊賀の出身で、奥の細道に旅に出た目的を「松嶋の月先心にかゝりて」と書いているにもかかわらず、仙台には五月四日から八日の四泊五日滞在し乍ら、肝心の松島には九日から十日の一泊しかしておらず、俳句のひとつも詠んでいないことから、「月とは仙台伊達

図6.
『仙台城絵図』（東北大パンフ）
④「亀岡八幡」（亀岡八幡神社）
図の右上
③「八幡別当千手院」
亀岡八幡の鳥居の左上
⑦「大工橋」図の右下
①「二の丸」図の左上
②「大手門」図の左中
⑩「大橋」図の左下



家のこと、当時幕府から日光東照宮修繕を命じられた仙台藩が、その莫大な費用に不満を持ち謀反を起こすのではないか、あるいは取り潰しの理由を探りに来た」という説も有名です。

筆者は学生時代、下宿から大学への行き帰りの急坂の途中に「関口芭蕉庵」という文京区の史跡公園があり、よく立ち寄ったものでした。ここは芭蕉が仕えた伊賀藤堂家が延宝五年（一六七七）から神田上水の改修工事を行ない、その工事に従事した芭蕉が住んだ工事現場や水番屋跡で、後に芭蕉の弟子たちが建てた「龍隠庵」を伝えるものですが、藤堂家は藩祖藤堂高虎以来、築城や土木水利技術に長けており、その工事監督をつとめた芭蕉が「水の手」の技術に長じていたことを示すものです。雨宿りにかこつけて茶室に入り「水の手」を探っていた、とも考えられないでしょうか。

なお、芭蕉隠密説はともかく、同行した曾良（岩波庄右衛門正字）は宝永六年（一七〇九）に幕府の巡見使御用人（随員）として九州をまわり宝永七年（一七一〇）対馬で客死しています。巡見使とは諸藩の内情や幕命の実施状況を調査するために、幕府が派遣する役人であり、その随員であ

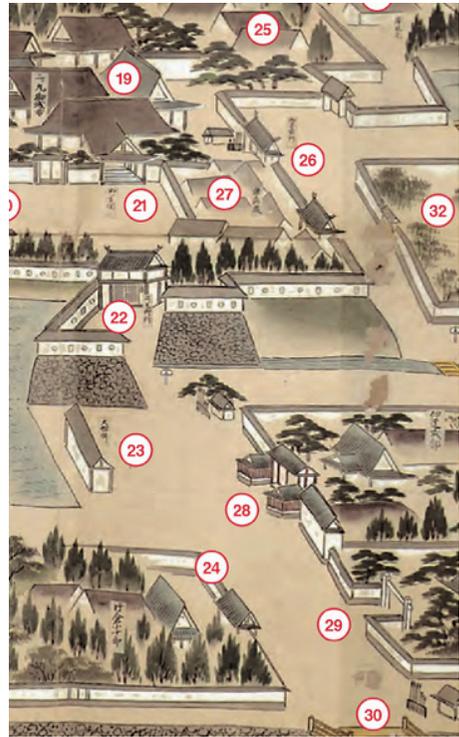
る曾良は幕府の御用で調査活動をしていたこと、その曾良自身が日記にわか雨を理由に川内（仙台城内）のどこかにある茶室に入ったと記録していることは、事実です。

仙台城絵図の二ノ丸御城居（二の丸御殿）中奥

二ノ丸御城居について、東北大パンフで次のように記しています。

仙台城二の丸は、寛永十五年（一六三八）に二代藩主伊達忠宗により造営された。政宗の時代には本丸にあった政治の中心としての「表」と藩主とその家族の生活空間である「中奥」に二の丸は分離していた。十七世紀末、四代藩主綱村の時に二の丸の拡張工事が行われ、特に「中奥」が政宗の長女五郎八姫が住んでいた西屋敷を取り込む形で拡張された。その後、文化二年（一八〇五）に落雷で焼失したが元通り再建され、明治十五年（一八八二）に焼失するまで二の丸の建造物は存在した。他大名家の居城と比較すると、二の丸「中奥」の規模は大きかった（「仙台城絵図」の「御奥」）。大名の本妻は江戸屋敷にあったので、「中奥」では藩主の参勤交代に伴い江戸から下った側室や側室が生活をしており、「中奥」で誕生した藩主の子どもは系譜上、

- 図7. 『仙台城絵図』（東北大パンフ）
- ⑲ 「御奥」（二の丸中奥）
 - ⑲ 「二ノ丸御城居」（二の丸御殿）
 - ⑳ 「二ノ丸御門」（大手門）
 - ㉑ 「伊達式部」（登米伊達家屋敷）
※現仙台国際センター展示場
 - ㉒ 「伊達繁太郎」（水沢伊達家屋敷）
※現仙台国際センター
 - ㉓ 「片倉小十郎」（片倉家屋敷）
※仙臺緑彩館（整備中）
 - ㉔ 「大橋」（城と城下町をつなぐ橋）



五〇人確認できる。成長すると江戸に移り、大名家の養子になるか嫁ぐこともあったが、むしろ涌谷伊達家や登米伊達家といった伊達家一門の養子になるか嫁ぐ事例の方が多かった。藩主家と一門をつなぐ役割を担った子どもたちの養育空間として「中奥」は重要な機能を有していたのである。（清水翔太郎）

仙台城絵図の登米伊達家

東北大パンフの『仙台城絵図』には、二の丸に最も近くに、「伊達式部」の名と、登米伊達家屋敷（現仙台国際センター展示棟）が、有名な赤門もはつきりと、描かれております（図7）。

寛保二年（一七四二）登米伊達家七代式部村倫は病氣となり、仙台藩五代藩主吉村公の子供を家督にもらい受けたいと願ひ、吉村公は仙台城二の丸中奥で養育されていた五男幸五郎を家督にと申しつけました。村倫は同年七月二十五日、二十八歳で死去。幸五郎は式部村候、のちに式部村勝と名乗り、登米伊達家八代を相続しました。

しかし八代式部村勝は登米には一度も下向せず、宝暦二年（一七五二）に一関藩主田村村頭の養嗣子となり、二の

丸中奥で養育されていた吉村公八男政五郎が九代を継ぎ、式部村良と称しました。

西法院武安流武者捕の伝承

この時の仙台藩茶道頭は、四世清水道簡（一七一六～一七八三）です。仙台城残月亭や二の丸で、吉村公の五男幸五郎、八男政五郎も四世道簡から茶道の指南を受けていたことはあきらかです。

寛保二年（一七四二）から宝暦二年（一七五二）までの十年間、登米伊達家当主式部村勝は仙台城内の屋敷に居りました。家中の清野治太夫紀郷もその側に仕え、その間に仙府（仙台城下）で松浦（大内）武兵衛武安より西法院武安流武者捕の教えを受け、寛延四年（一七五二）遂に奥義悉く伝授され、登米に伝えました。治太夫は馬上通の身分であり、石州流清水派の茶道も稽古したと考えられます。

なお、西法院武安流武者捕の開祖松浦（大内）武兵衛武安について、『仙台人名大辞典』には「マツウラブヘエ【松浦武兵衛】武藝家。藩の大番組、村田太郎右衛門重家より傳へたる西法院武安流武者取柔術の奥秘を得、門人頗る多し、天明頃の人なり。」とありますが、天明（一七八一～

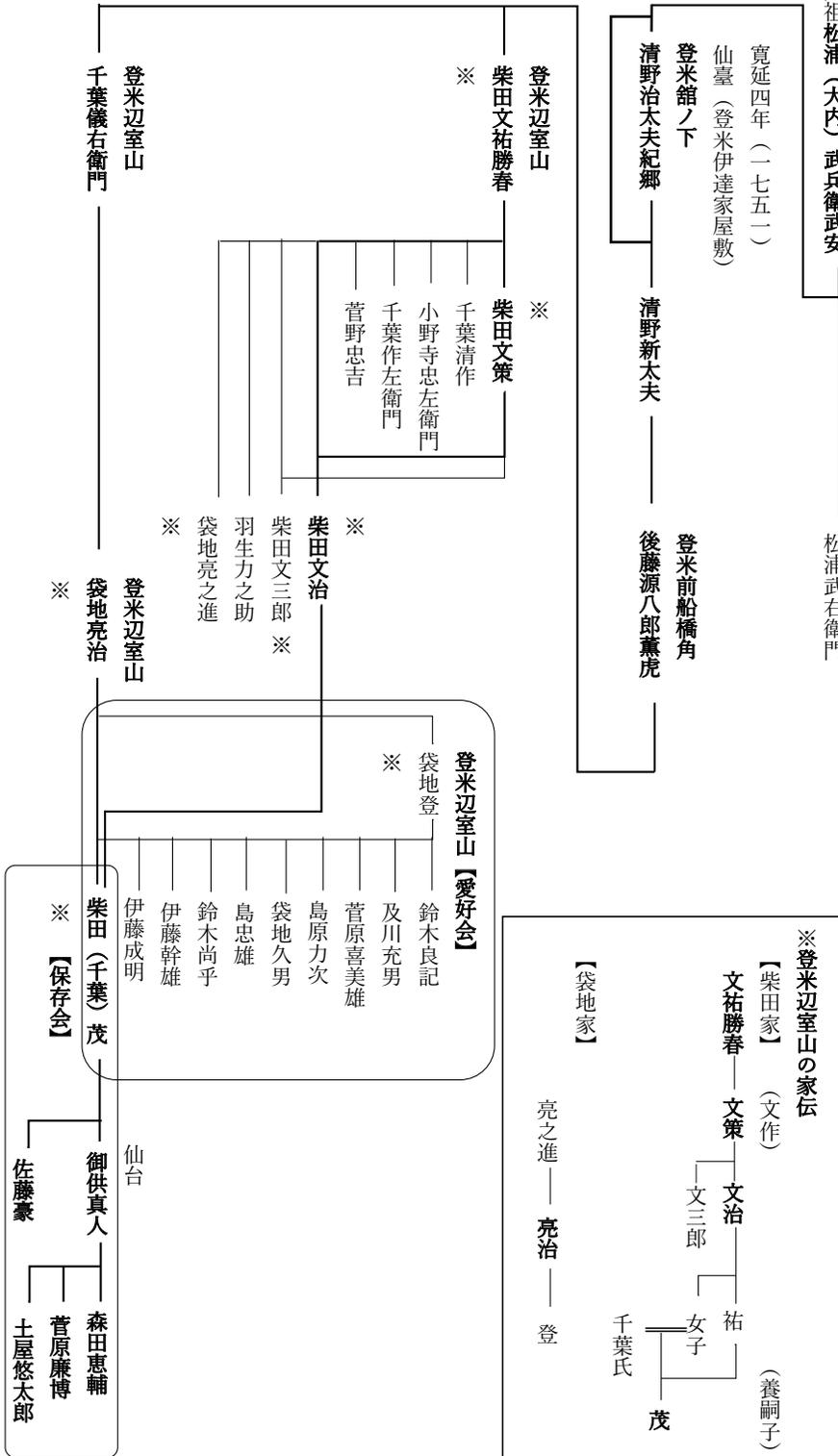
一七八九）は清野治太夫の免許皆伝より三十年の後であり、時代が合いません。天明頃に活躍したのは武兵衛の後継者武右衛門であり、二代にわたる活躍が武兵衛ひとりのものとして後世に伝えられたものと言えましょう。

登米へ戻った治太夫は、現在も枝垂れ桜で有名な舘ノ下の清野家屋敷で息子新太夫に伝え、新太夫は同じ馬上通の身分で前船橋角の後藤源八郎薫虎に伝授しました。「仙台大内武兵衛、登米清野新太夫、前舟橋後藤源八郎」と記された免許もあることから、新太夫も仙台で開祖武兵衛から伝授を受けたと考えられています。後藤源八郎は辺室山の柴田文祐勝春と千葉儀右衛門に伝授し、両名はそれぞれ柴田文策・文治と袋地亮治にこれを伝え、柴田文治と袋地亮治より伝授を受けた筆者の師柴田（千葉）茂が平成二十五年（二〇一三）に逝去されるまでの約二百六十年間、登米で伝承されました（図8）。

柴田文祐勝春は百有余人の弟子を持ち、その実力と名声が認められて水沢県（明治四年（一八七一）に現宮城県北部から岩手県南部の北上川流域が水沢県となり、明治五年（一八七二）に県庁を登米に置く。明治八年（一八七五）県庁を一関に移し磐井県に改称。）の番人頭に任命され、

図8. 登米における西法院武安流武者捕の伝承

仙臺(仙府) 寛保(宝曆頃(一七四〇)～六〇年代) 頃 天明頃(一七八〇年代)
 開祖松浦(大内) 武兵衛武安 松浦武右衛門



また、千葉道場を継いだ袋地亮治は門弟百余を数えるなど、西法院武安流武者捕は登米を中心に隆盛を誇りました。

令和三年（二〇二二）、筆者は伝承二百七十周年を記念して、柔術の弟子の土屋悠太郎君を伴い登米を訪れ、柴田文祐勝春翁顕彰碑である長谷寺の柴田壽域記と、登米神社の袋地亮治翁之碑の前で、流儀の先師に対し七ツ蜻蛉の演武を奉納しました。石州流清水派の茶道とともに、西法院武安流武者捕の柔術も伝承に努めて参ります。

まとめ

常在戦場を旨とする武士が、城内に設営した施設に、軍事用の役割を持たせることは当然であり、武家茶道である石州流清水派の茶室仙台城残月亭に、軍用の節の役割に「物見」「水の手」「退き口」の三つがあったものと考え、資料を読むだけでなく、仙台市内、宮床、登米に足を運び、本論をまとめました。

なお、石州流清水派の茶庭及び茶室については、茶道頭の継承者である宗家十一世大泉道鑑師が十八冊からなる『動閑茶湯書』のうち、昨年の茶庭に関する『露地之書』に続き、茶室に関する『茅葺數奇屋寸法』の解説研究の成

果を学術誌『茶の湯文化学』三十七号に掲載され、またその概略を『関』でも分かり易く紹介される予定と伺っておりますので、ご一読ください。

筆者も、林子平先生の「武士は武芸に精を入れて兼て少しく天文地理を知り亦少しく茶の湯と猿楽（能楽）とを知るべし」という教えを実践し、現地に足を運ぶことで天文地理を知り、「武芸」は仙台藩登米領伝承の西法院武安流武者捕、「茶の湯」は仙台藩茶道頭の手数を伝える石州流清水派、「猿楽（能楽）」は仙台藩乱舞方佐藤家の喜多流を、仙台藩当時と変わらぬ伊達文化を現在に伝える心の月として、来し方行く末いづくぞと問い乍ら、稽古と伝承に努めて参ります。

参考文献（五十音順）

- 『老岐島史年表』 山本隆夫編 老岐文化社
一九八六年（昭和六十一年）
- 『奥の細道 他四編』 麻生磯次訳注 旺文社文庫
一九七〇年（昭和四十五年）
- 『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』 十世大泉道鑑
一九八〇年（昭和五十五年）

『柔術西法院武安流武者捕』 柴田茂

二〇〇九年（平成二十一年）

『春耕曾良を尋ねて（二二九）幕府巡見使の御用人として九州へ』

通巻四九〇号 乾佐知子 二〇二〇年（令和二年）

『上洛日記』 秋月謙一 二〇二一年（平成二十三年）

『関』三十一号 御供真人 全日本石州流茶道協会

二〇二二年（令和三年）

『仙台市史通史編5「近世3」』 仙台市

二〇〇四年（平成十六年）

『仙台市史特別編7城館』 仙台市

二〇〇六年（平成十八年）

『仙台城二の丸と川内武家屋敷地―東北大学川内キャンパスの歴史遺産―』 東北大学東北アジア研究センター

二〇二二年（令和三年）

『仙台人名大辞典』 菊田定郷 一九三三年（昭和八年）

『仙台領に生きる 郷土の偉人傳Ⅱ』 古田義弘 本の森

二〇二二年（令和三年）

『伊達家治家記録』 宝文堂

一九七二年（昭和四十七年）〜一九八二年（昭和五十七年）

『茶の湯文化学』三十七号 十世大泉道鑑・十一世大泉道鑑

茶の湯文化学会 二〇二二年（令和四年）

『林子平先生伝』 齋藤竹堂 伊勢安書店

一八九二年（明治二十五年）

『林子平その人と思想』 平重道 宝文堂

一九七七年（昭和五十二年）

『政宗の黄金の城（まち）』 首藤尚丈 プレスアート

一九九六年（平成八年）

『大和俗訓』 貝原益軒著・秋月謙一写本校注 好古書院

二〇一五年（平成二十七年）

『留魂録』 吉田松陰著・秋月謙一編著 好古書院

二〇一五年（平成二十七年）

顕彰碑『柴田壽域記』 千葉庄左衛門

一八九六年（明治二十九年）

顕彰碑『袋地亮治翁之碑』 弟子一同

一九五三年（昭和二十八年）

史跡標柱『郷六御殿跡』 仙台市教育委員会

史跡標柱『郷六城跡』 仙台市教育委員会

新聞記事『着物・雪駄で一〇〇〇⁺完歩』 朝日新聞神奈川版

二〇一四年（平成二十六年）十月五日

新聞記事『さようなら「お侍さん」』 熊本日日新聞

二〇一四年（平成二十六年）四月二十八日

新聞記事『名称は「仙臺緑彩館」 仙台・青葉山公園センター、23年4月26日開館』河北新報

二〇二一年（令和三年）十二月十四日

説明板『残月亭跡』 東北大学植物園

二〇一四年（平成二十六年）

説明板『清野家のシダレザクラ』 登米市教育委員会

二〇一八年（平成三十年）

説明板『林子平ゆかりの地』 仙台市教育委員会

二〇一八年（平成三十年）

展示資料『登米伊達氏』 教育資料館旧登米高等尋常小学校

展示資料『宮床の伊達様』 宮床宝蔵

ホームページ『河合曾良の終焉地』 老岐市立一支国博物館



『清野家のシダレザクラ』説明版より

元禄年間（1688～1704）に植えられたと推定され、清野治太夫が西法院武安流武者捕を登米に伝えた寛延四年（1751）と変わらず咲き続ける清野家屋敷の枝垂れ桜